
王国記

あんのーん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王国記

【Nコード】

N8402N

【作者名】

あんのーん

【あらすじ】

旅の詩人が夜毎、とある王国の姫に語る、古の姫と^{いにしえ}その従者の一代の物語

「ゼルダの伝説/時のオカリナ」の後日譚です。その時々思いついたエピソードを書き加える、時系列全く無視の超絶不定期連載になる予定。多分常時赤字点灯状態になるかも。スミマセン^^; 原作をご存じない方にも楽しんで頂けるお話にしたいと考えています。原作エンディング後のお話ということで、オリジナル設定

満載。もしかしたら、原作をご存じの方には却って違和感があるかも知れません。ただ、原作に対するリスペクトは大切にしていることをお約束いたします。

第一夜―物語の始まり 1

はじめまして。

今宵は私のような者をお召し下さり、ありがとうございます。ああ、いえ。ご心配には及びません。旅暮らしが長うございますので、荒事も多々経験して参りました。逃げ足だけは速うございます。

それよりもかような部屋でおひとりで……さぞやお寂しかったことでしょう。せめてこの語り言が、あなた様のなぐさめとなりますことを祈りつつ。

昔々の物語です。

辺境の王国、ハイラルは小さいながらも美しい国で、そのため他国との争いが絶えませんでした。

この国の王女はゼルダといい、美しい姫様でしたが父王もなく伴侶もおらず、それも争いの元となっておりまして。隣国は頼る者のない姫を軽く見、力づくで宝石のごとき王国を我がものにせんと欲していたのです。またハイラルには天地創造に関するひとつの伝説があり、それはこの小国、ハイラルこそが天地開闢の地であり、この国のどこかに神がもたらした「黄金の力」が存在するというものでした。

伝説はなおも語ります。ハイリア人の高い耳は神の声を聞くがゆえであると。

最も濃い血を受け継いだ王家とは、代々ハイラルの三女神に仕える巫覡のことでもあったのでした。

時代が下り血も薄まり、伝説もおおかたは風の中に消えていきましたが、ただひとつ「黄金の力」にまつわる物語だけは、人々の心から去ることはありませんでした。そうしたわけで、ハイラルはもう長い間戦の中にあつたのでした。

さて、その日、姫はそわそわと朝から落ちつけずにおりました。絶体絶命と思われた戦で敵を打ち破ったハイラル騎士団が凱旋してきたのです。姫はその中に騎士団と共に戦い、これを大いに助けたひとりの男が加わっていることをあらかじめ知らされておりました。

「姫、騎士団長が参りました」
側近がそう告げるいとまもなく、姫は美しい声で「こちらへ」と呼ばわれました。

騎士団長、バンゼツタが進み出ました。傷だらけの無惨な鎧が戦の激しさを物語っています。彼はたいそう粗末ななりをした、ひとりの男を伴っておりました。凱旋の将を労うために集まっていた広間の人々は男を見て眉を顰めました。バンゼツタも姫も、そしてその男自身も、それを意に介する素振りは見せませんでした。

「こたびの戦、ご苦労でした」

姫がバンゼツタに、優しく声をかけました。その青い瞳にも、慈愛と感謝が溢れていました。

「たいそう厳しい戦いであつたと聞いています。勝利はもちろんですが、私にはあなたがたの無事の帰還が、何よりも喜ばしい……」

「畏れ多きお言葉、ありがたく存じます」

バンゼツタは跪き頭を垂れたまま、右手で男を指し示すと続けていいました。

「この者のおかげです。この者がいなければ、我々は生きて再び愛しき祖国の地を踏み、陛下にまみえることは叶わなかったでしょう」
姫はバンゼツタから男に視線を移しました。伸びた金髪を無造作

にまとめ、伏せたその顔は涼しく穏やかなものでした。

「あなたの働きは聞き及んでおります……私はハイラルの王女、ゼルダ。私からもお礼を申します」

広間の空気が微かにさざめいたのは、みずばらしいその男がかような英雄であつたからのみではありません。

男にお声をかけたとき、姫の声が震え、あまつさえ涙ぐんでおられるように見えたからでした。

「お目にかかれて光栄です、ハイラルの姫」

男もまた、跪いたまま答えました。

「お立ちなさい、あなたも、バンゼツタも。今宵はささやかながら宴の席を用意させましょう」

二人は立ち上がりました。人々がバンゼツタのもとへと集まり、労つたり称えたりしています。人々に囲まれたバンゼツタの少し後ろに付き従い、彼と共に広間を出ようとした男に姫が声をかけました。

「少し……お話を」

そしてお側の者にもいいました。

「他の者は下がりなさい。しばらくこの者とふたりにしてください」

「ゼルダ様、それは……」と、侍従が不安げに声を上げましたが、

姫のいささか厳しい一瞥にその後の言葉を呑み込むと、彼も他の人々と共に広間を出て行きました。

後には広間にはただ男と姫のみが残りました。

「小さな頃、よく怖い夢を見ては父に泣いて訴えたものでした……」

姫の言葉は唐突でしたが、男は優しく「どんな夢をご覧になったのですか？」と訊ねました。

「天が暗雲に覆われ、落ちてくるのです。全ての光は死に絶え、闇が支配し、魔の跋扈する世界……私は『世界が滅んでしまう』と必死に訴えました。父は本気にはしてくれませんでした」

姫はそこで一旦言葉を切ると、はにかんだように笑いました。

「もちろん父が正しかった。この世界は今もこうしてここにありま

す。……平和だとは言い難いですが、少なくとも闇に支配された世界ではありません」

「この国は女神の降りたもうた約束の地。闇の入りこむ隙などあるはずがありません」

男がそういうと、姫はまた笑顔を見せて「待つて……まだ続きがあるのです」といいました。

「ある時見た夢はいつもと違っていたのです。暗雲に覆われ、暗闇に閉ざされたこの地に一条の光が差し、その下にはひとりの男のひとが……」。

今でもよく覚えています。その夢がとても不思議だったから……」

姫はそこで小さく息を継ぐと、また語り始めました。

「夢の中には私がいて おかしいでしょう……？ 私が見えている夢なのに、私の姿が見えるなんて そのひとが、私に『なぜ泣いているの？』と訊ねたのです。」

私が『お空が落ちてくるの』といったら、そのひとは私を抱き上げて……そして『大丈夫だよ』と喋ってくれた……」

「それから、私はあれほど毎晩のように見ていた悪夢を見なくなりました。私は……」。

夢のあの男のひとが、私を悪夢から救ってくれたのだと思いました……」

姫は話の間伏せていた睫を上げると、男をじつと見つめました。

「数日前、早駆けの伝令があなたのことを伝えて来る前から、なぜだか私にはわかったのです。夢の中の、あのひとに会えると……」。

あなたなのでしょう……？ 幼い私を悪夢から救い出してくれたのは……」

男は黙って姫の話を聞いていましたが、やがて姫をまっすぐに見つめ返し、そして跪いていました。

「そうです、姫。私が姫をお守りします。」

私はリンク。この身の全てを以て、姫にお仕えいたします」

第一夜―物語の始まり2

一週間ほど前のことです。

ハイラル騎士団は隣国の兵どもに谷の奥へと追い立てられ、まさに殲滅されんとしていました。そこには馬の嘶きと剣を切り結ぶ音、そして怒号と悲鳴が渦巻いておりました。姫の騎士であるバンゼツタはこの中にあり、自らも馬から下りて疲弊した兵達を励ましつつ戦っていました。倒れている者に気を取られた瞬間、敵兵が剣を振りかざし、将の首を上げんと斬りつけてきました。

バンゼツタは思わず死を覚悟しました。己れの剣より、相手の一太刀の方が早いことがわかったからです。しかし敵兵の剣がバンゼツタを切り裂くことはありませんでした。それは力を失い、兵はくずおれました。

「……………」

続けて周囲の敵兵がばたばたと倒れました。いずれもその背中や胸を、深く矢が射抜いていました。バンゼツタが視線を上げると、その先にはひとりの若い男の姿がありました。

男が矢をつがえ、放つと、またひとり敵が倒れました。

「ハイラルの者か？」と、男は叫びました。

「我らはハイラル騎士団！ 私はハイラルの王女に仕える騎士、バンゼツタである！」

遠目でよくわかりませんでした。男は少し微笑んだようでした。彼は弓を下ろし、代わりに腰にたばさんだ剣を左手で引き抜くと、居並ぶ敵をなぎ払いながらバンゼツタの許へと駆け寄ってきました。

「私はハイラルの姫に縁ある身、助太刀する！」

バンゼツタは目を見張りました。まさに鬼神のごとき剣の鋭さ、強さです。疲れ切っていた兵達の目にも、再び光が宿りました。男の働きに、もしかしたらこの場を脱することが出来るかも知れぬ、

という希望を持ったのです。しかし隣国の兵達は、まるで地の底から湧いて出るかのように後から後から押し寄せてくるのでした。

その時バンゼツタは見たのです。男の左手の甲に浮かび上がる、微かな光を。

「それは」

「これはかつて私の身の上にあつた力の残影に過ぎぬ」

男はバンゼツタに答えるともなくいいました。その瞳は眼前の敵を見据え、青い炎が燃え立つようでした。

「それでも、今我らが敵を打ち破るほどの力はまだ貸して貰えるようです」

男は手にした剣を高く掲げると声高く叫びました。

「猛き女神、デイン！ 今ひとたび、我が剣に力を与えよ！」

男の左手の光は一層強くかがやき、まばゆく白い炎がその剣から吹き上がりました。

「奮い立て！ ハイラルの武人よ！ 敵を打ち倒せ！」

バンゼツタも叫びました。

鬨の声が上がりました。ハイラルの兵はデインの炎に守られ、こうして敵をことごとく討ち取ったのです。

平原を茜雲が染め、その空を澄んだ鐘の音が響き渡っていきます。それは戦で果てた兵を弔うために鳴らす弔鐘でした。宴に先立ち、姫はごくわずかな供とリンクを伴い、町はずれに建つ神殿に参っていました。

姫が祈りを捧げた祭壇には三つの窪みがありました。それを感慨深げに見ているリンクの視線に気づいた姫は、

「そこには『ことあらば、此処へ三つなる宝玉を捧げよ』とあるのです」といいました。

姫は上代の言葉で書かれたその神託に、リンクが興味を惹かれたのかと思ったのです。その時側には姫とリンクのほか、誰もおりま

せんでした。

「姫はご存じですか？ その宝玉を」

リンクが穏やかに訊ねました。

「いいえ」と姫は答えました。

「誰もその宝玉を知りません。この神殿はとても古いものです。この祭壇も、いつ、誰によって作られたのかさえ伝わっていません。」

この神託が何を意味するのか、今は知る人はありません……」

「ひとつは深き森に。いまひとつは炎の山に。そしてもうひとつは静けき湖の底に……」

え……、と、姫は小さくつぶやきました。

「あなたは知っているのですか……？ この神託の意味を」

「知っています。三つの宝玉は、王家に縁の隠れ里にある……しかしそこへ至る道は、今は閉ざされました」

そういいながらくぼみに触れたリンクの指先はそれを愛おしむかのようであり、姫には目の前の静かな眼差しの男が、口からでまかせをいうとも思えませんでした。

「……いつかそのお話、聞かせていただけますね……？ あなたの、来し方も……」

リンクは微笑み「喜んで」というと、姫の手を取りました。

「姫にお話したいことが数限りなくあります。夜ごとに語っても、きくと語りきれないことでしょう」

姫も微笑みました。

「そろそろ参りましょう。もうすぐに日が暮れる……今宵はあなたを皆にも紹介せねばなりません」

第一夜―物語の始まり3

城の中庭で催されたその宴では、リンクは姫のお側近くに席を与えられました。

時折姫が笑いかけ、リンクもそれに応えています。簡素だけれど仕立ての良い服に着替え、髪にも櫛を入れてこざっぱりとした彼は表情も穏やかで、谷で鬼神の如き剣を振るった者とは別人のようでありました。

「陛下にも困ったものだ。どこの馬の骨とも知れぬ者をあのよう……」

と、いつの間に側に来たのか、姫とリンクの様子を見るともなく見ていたバンゼツタに話しかけてきた男がありました。

年の頃は三十代半ば、バンゼツタよりは若く、リンクよりは年上と思しき男です。二人と違いすんなりとした体つきで、身につけたものも装飾の施された上品なものでした。

「どこかの馬の骨ではない。あれは我らの同胞、ハイリア人だ」
バンゼツタはいささかむっとした様子で答えました。

「それとても、あれのでまかせかも知れぬ。この乱世に、ハイリア人がなんの用があつて谷の辺りをうろろしていたのだ。だいたい悔しくないのか、貴殿は……あの席は本来貴殿のものであるう」

男はなおもたたみかけるようにいいましたが、バンゼツタはこれを遮りました。

「先の陛下のお言葉を聞いたであろう。陛下があれを信頼し、お側に仕えさせると決められたのだ。我らにもあれを信じ、敬意を以て接するよう仰った……それを貴殿はないがしろにするというのか？」

男は一瞬不快な表情をしましたが、すぐにあからさまな侮蔑を口の端に浮かべていました。

「これは私としたことが申し訳ない……貴殿と郎党はあれに命を救

われたのだから、それは悪し様にいう訳にはいくまいな」

男が立ち去ると、今度は別の若い男がバンゼッタに話しかけてきました。

「アグニム様はリンクがお気に召さぬようですね」

それは谷で共に戦った兵のひとりでした。

「戦で手柄を立てたといつても、生まれも育ちも知れぬ、今日初めて会ったばかりの者を陛下が重用するのが不安なのだろう。一国の宰相として、その判断はわからぬでもない……」

「しかし陛下とリンクは古い知り合いのようではありませんでしたか。失礼ながらアグニム様は……リンクを連れ帰ったのがバンゼッタ様なのがお気に召さぬのかと……」

「滅多なことは口にするな」

バンゼッタが短く制しました。

「申し訳ありません。しかし……」と、詫びつつ男は言葉を継ぎました。

「アグニム様は以前より、バンゼッタ様に何かと冷ややかでいらつしやる……。皆も気づいております。私どもは悔しいのです……命を賭して国を守っているのは、バンゼッタ様と我らであるというのに……」

「国を守っているのは武人だけではない」

と、バンゼッタがいました。

「皆、それぞれの立場で、このハイラルを守るために戦っているのだ。それを忘れてはならぬ」

その言葉に男ははっとしたようでした。

「そうでした……すみません」

しばらく沈黙があり、男の様子が気の毒になったバンゼッタは彼に杯を勧めると、

「そういえばおまえは見たか？」と話しかけました。

「あれの左手に……」

「ああ。左利きでしたね」

男はバンゼツタが怒っていないのに安心したのか、笑顔で答えました。

「左利きの剣士は初めて見ました……それにしても強かった。敵をなぎ払う彼の白刃が、まるで炎か風のように見えましたよ」

「……そうだな」

バンゼツタも笑顔を見せました。

「さあもう行け。今宵は陛下が催してくれたせつかくの宴だ。皆と飲んで歌って、しばし戦も憂さも忘れるがよい」

男が立ち去り、バンゼツタはまたひとりになりました。

バンゼツタは元々ひとりでいることが嫌いではありませんでした。姫の信任も厚く、部下や民からも慕われたこの武骨な武人にはかつて妻がありました。このひとは過ぐる年、戦火で命を落としました。それ以来彼は新たに妻を娶ることをせず、心の内にひっそりと彼のひとの面影を抱き続けていたのです。さほど多くはないひとりの時間は、バンゼツタにとって心の内の妻と向き合い、語り合うことの出来る大切なひとときでもあったのでした。

しかし今、バンゼツタの心を占めていたのは妻のことではありません。彼は戦いの最中、あの風来の剣士、リンクの左手に浮かび上がった“光”のことを考えていたのです。

見まがうはずもない、あれは確かにハイラルの象徴でした。

トライフォース 勇気と力、そして知恵。三女神を表すこの象徴は、ハイラル王家の紋章でもありました。

あれは何者なのだろう、という疑問は、実はバンゼツタ自身が最も強く感じていたのです。しかし彼は、リンクが何者であっても、王家に仇なす存在でないことだけは確信していました。

そうでなければ、デインのご加護のあるはずがありません。それに、ふたりが広間でまみえたときの様子……。

ハイラル王家の正当な後継者たるゼルダ姫は女神に仕える巫女でもあり、幼い頃より不思議な力を秘めていると囁かれていました。バンゼツタは姫がお小さいときからお側でお守りしていましたから、

姫がこれ以前にリンクと会ったことがないことを知っていました。

実際に会ったことのない男を以前から知っていたというのなら、それは神の啓示であろう……と、バンゼッタは思いました。それにリンク　ハイラルの象徴を左手に宿し女神の名によって敵を排したあの男は、最初に「ハイラルの姫に縁がある」とはつきりいつたのでした。

神がああ男を遣わしたのか……

そこまで思い至ったとき、バンゼッタの心の内に小さな懸念が芽生えました。

しかし彼は、その懸念をまた心の奥底にしまいました。今宵は戦勝の宴、不吉な思いはこの場にふさわしくないと思ったからです。

バンゼッタは再び姫を見やり、満足げに目を細めました。

本当に久しぶりを見る、晴れやかな笑顔がそこにありました。

ああ、夢中になっておりますと、時が経つのも忘れてしまいます。すっかり夜も更けてしまいました。今宵はこれにて。

第二夜―湖畔のひととき

お久しゅうございます。ご無沙汰いたしまして申し訳ありません。お元気でおられましたでしょうか……かように寂しげなお顔を見ますと、心が痛みます。

今夜はひとつ、短いお話をいたしましょう。

リンクは姫を愛馬の前に乗せ、後ろから支えるようにして手綱を取って平原を走っておりまして。

まだ肌寒い季節のことにて、ふたりは厚手の外套を身につけておりましたが、太陽は暖かく平原には爽やかな風が吹き渡り、空は高く青く澄んでおりました。

他に供の者もない、お忍びでのお出かけです。ですが……、いえ、だからこそ、姫の心は浮き立っていたのです。リンクは特別に姫の護衛騎士という身分を与えられ、その頃は戦もありませんでしたが、いつも姫のお側におりましたが、ふたりきりということは滅多にはありませんでしたから。

リンクが姫を誘ったのは、平原の南にあるハイリア湖畔でした。空を映した水の面がどこまでも透明で平らかな、美しい湖です。

眼下に湖が見えた時、リンクは微笑みました。湖畔の古びた小さな建物も、褪せた着物を着せられ雨風に晒されて傾いだ案山子も、リンクが覚えているそのままでありました。

「お疲れでしょう」

下馬する姫に手を貸しながらリンクがそう言うと、姫は笑って応えました。

「いいえ、ちつとも。それでも小さな頃はお転婆で通っていたのですよ」

リンクも笑いました。

「存じています」

「……………」

姫の笑顔が、ふと淋しげに変わりました。

「あなたの知っているゼルダは、どんなひとだったのですか……？」

「素晴らしいお方です」

まっすぐに姫を見つめ、リンクはためらいのない口調で答えました。

「気高く美しく、決して絶望することのない強い心をお持ちでした。魔王にこの世界を奪われたとき、あなたはご自身も追われる身でありながら何度も私を助けてくれ、そして私を励まし続けてくれました」

「……………」

「それは……」

姫は少し言い淀みました。笑おうとしたようですが、それも心許なく歪んだだけでした。

「でもそれは、私ではありません……」

リンクの言う「姫」とは、かつてリンクがここではない、どこか遠い別のハイラルで共に戦ったひとのことでありました。

リンクの語る魔王との戦いの物語はとても不思議で、姫には古いお伽話のようにも思えたものでしたが、それが作り言などではないことは、ちゃんとわかっていたのです。

だからこそ、リンクが己れに向かい、敬愛と慕情をこめて「あなた」と呼びかけながらそのひとを語る時、姫の心を寂しさが締めつけずにはいないのでした。

リンクには確かに姫と共に戦った記憶がある。けれどもそれは己れは持たぬ記憶。そこにいる姫は自分ではない別のひとなのだ、と、

リンクが思い出を語るたびに突きつけられる心地がするのです。

美しく豊かな大地、ハイラル。

魔王との戦いもこの世界では起こり得ず、姫自身も知り得ぬことでありました。

ハイラルの正統な後継者として生を受けたその時から、姫は庇護され、皆にかしずかれて生きてきました。戦乱は遠く、物心ついた頃にはすでに国は平和を得ておりました。この国が再び脅威にさらされたのは、先王がみまかった後のこの数年のことだったのです。

「この世の私は、ひとりでは何もできぬあまりにもちっぽけな存在です。女の身につけこまれ、他国の侵攻を許してしまいました……」どこまでも高い空。彼方に連なる遙かな山々。そこに戦の影はなく、ただ明るい光が世界に満ちています。

リンクは目の前の湖面に目を移しました。それは陽の光を受けてきらきらと輝き、その煌めきの間から湖底に沈んだ古の神殿いにしえが見えました。

かつて、リンクが光の世界を取り戻すために戦った水の神殿です。しかし今となつては、目の前にありながら、遙かに遠く再び訪れることの叶わぬ場所でありました。

「この戦役は長く続くでしょう。今の平和は一時のもの。早晚約定は破られ、この地を再び戦火が覆うに違いありません……」

暗く沈んだ姫の声に、リンクは目を上げました。

「私に出来るのでしょうか……？ この国を、守ることが……」

姫の表情は翳り、心細げで、この美しい風景の中ではひどく奇異に見えました。

「私がいます」

リンクは微笑むと、目を伏せた姫の手を取りました。温かく力強い掌が、姫のそれを包みました。

「私こそが姫の盾であり、剣なのです」

「……リンク……」

「そのための私の命です。私の全ては、あなたと、あなたのハイラルのもの……」

「……」

姫はもう何も応えず、ただその手をやわらかく握り返すと、ふたたび目を伏せそつとリンクに寄り添いました。

リンクはもう一方の腕を姫の背中に廻すと、その腕に力を込めました。

誰も知ることのないその様子は寄り添う恋人達のようにであり、湖の明るく煌めく空気とひんやりとした風が、ふたりを優しく包むのでした。

> i 1 8 2 4 4 — 1 4 <

第二夜―湖畔のひととき（後書き）

大変ご無沙汰しております。

お読みくださり、ありがとうございます。

世間では恋人達の日ということで、10年ほど前に書いたssを少し手直しして載せてみました。

このssは元々イラストに添えたものでしたので、そちらもやはり少し手直しして（といいつつ、直しきれなかったのですが；）挿絵代わりに載せておこうと思います。

ささやかなバレンタイン企画ということで、ひとつご覧ください

^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8402n/>

王国記

2011年2月13日17時40分発行